

おお大勝利

平成 28 年度山東サッカー一部報第 17 号 (9 月 29 日)

サッカー部保護者の皆様、OB・OGの皆様、日頃より本校サッカー部の活動にご理解とご協力を賜りまして、感謝申し上げます。

Y2B最終戦 山南に屈する

9 月 24 日 (土) Y2B 第 14 節 (最終節) 山形南戦が山形市球技場で行われました。部報前号で書きましたように、①10 月 8 日から始まる選手権に弾みをつける意味でも、②ライバル校に負けられない意味でも、③地区新人で敗れており 2 連敗は許されないという意味でも、何としても勝ちたい試合でした。もちろん前節で山東の Y2B 優勝は決まっており、そして相手の山南も前節で昇格の可能性のある 3 位以上がほぼ見込めなくなり、この節は双方にとって消化試合ですが、そんなのは関係なし。「この試合は負けてもいい」などと勝負にえり好みをしていると、勝ち癖が身につかない。「大事な試合だけ頑張ろう」は虫が好過ぎるというもの。ということで、**意地と意地のぶつかり合い**の試合となる。

試合は山形市球技場。人工芝の中でも新しい最高の環境。第 1 試合 10:00、第 2 試合 12:00 開始の予定における第 2 試合のはずが、施設を 13:00 までしか押さえられず、9:00~、11:00~の日程の第 1 試合。すなわち **9:00 キックオフ!** 公式戦で 9 時開始は早い。けどしょうがない。市内の学校同士の対決なので、全然問題なし。実際練習試合などでは普通の開始時間と言ってもいい (それでも早いか)。というか、**正月に越谷西さんと、5:00 キックオフの試合をさせてもらってから、何でも対応すべき (できる) という気持ち**が芽生えている。このチームは合宿等で早朝練習も経験済みであり、この時間は問題なし。多くの保護者の皆さまと、後援会からは**清野総監督、工藤先輩、後藤報道局長**といういつものメンバーが駆けつけて下さる。若い OB では、苗場に同行してくれた**マサヒロくん (山東 62 回卒)、オオツキくん (同左)、アカガワくん (山東 65 回卒)** が駆けつけてくれる。さあ、さわやかな朝の対決開始。

試合が始まると、膠着状態。**山東は、地区新人同様、低い位置からのロングキックは跳ね返され、ビルドアップは中盤で引っ掛けておしまい、という展開で、なかなか攻勢をつかめない。**前半、山南に崩されてもいないが、深く攻め込まれシュートも何本か打たせている。逆に山東の攻めは、鋭さ・正確性のいずれも欠けている。特に、**右 MF のフトシと左 MF タカヒラの落ち着きのなさ**が目立つ。二人はうまい選手ではないが、馬力があり、アグレッシブに縦に勝負できる長所があるが、ファーストタッチの乱れから、そもそも得意な形に持ち込めず、力を出し切れていない。ちなみにこの特徴は、この日も途中出場した **1 年ヤマサンやキクちゃん**にも言える。すなわち、**得意な形になれば面白い選手と言えるが、得意な形にまで持ち込むスキル・アイディア・パワフルさ**に欠ける。ゆえに、**前を向かせてもらえないなど、得意な形に持ち込ませてもらえない相手には全然力を発揮できない。**プレーの幅が狭い、とも言える。話を戻すと、両アウトサイド MF がプレーの安定性を欠き、そこから繋がらなくなる (相手にボールが渡る) ことが多い。前半 5 分 5 分の内容ながら、**前線から嵌めてビルドアップを許さず、山東 GK や DF に大きく蹴らせ、それをしっかり跳ね返して押し込み続けるという山南のゲームプラン**通りの前半の進行。それゆえ、山東の特徴が生きているとは言えない前半。一度、**3 年 FW ユート**が抜け出して左足で

シュートを放つシーンもありましたが決められず、両チームとも前半スコアレス。

後半は、4分6分。**山南のアカガワ弟**が前線で溜めを作って両サイドに展開し、そこから攻めるワイドな攻撃から、山南がチャンスを作る。山東も**2年ボランチカイト**がアウトサイドを深く挟むシーンもありましたが、結局合わせることができない。というか、**山東の選手、センターリングに止まっているシーンが多いが、深く挟んだ時は特に、ニアサイドをしっかりと狙ってダッシュする選手がいないと、そこがつぶれ役になってファーまでボールが流れるシーンも作れない**。山東のセンターリングに相手がニアサイドでクリアするシーンがやたらに多いが、それはボールが良くないというだけでなく、ニアで勝負する選手がいなかったことを意味する。危ないシーンも何とか凌いできましたが、左から攻め込まれ（山南が右サイドから攻撃し）センターリングに対して**フルアウェイの動き（ボールから離れる動き¹）でマークをうまく外した山南のFWにファーサイドでファインヘディングシュートを決められ、先制を許す**。その後、途中出場の**キクチャン**が右サイドを疾走し、マイナスのボールをユートに供給するも、なぜかグラウンダーで／ゴロで出せず（スキル不足）、ちょっとだけ浮かせてしまい、ユートにトラップを強いたために打ちきれない結果となったり、同じく途中出場の**ヤマサン**が左サイドをぶち抜いて、そのままシュートを放つも、相手GKにがっちり止められるなど、ネットを揺らすことができず。結局スコアそのまま0-1の負け。

地区新人の時は前半の前半は山東の一方向的な展開であり、徐々に山南に盛り返されましたが、こちらのミスがなければ勝利できた実感がありました。すなわち、あの試合は山東にとって勝つべき試合でした²。しかし、**この試合は試合自体を山南にコントロールされたというか、山南が勝つべくして勝った（山東が負けるべくして負けた）試合と感じました**。それだけに試合後の精神的ダメージも大きかった……。いろいろ言い訳も作れますが、**競り合いの強さ、戦う気持ちの面で、常に相手に先んじられるようでは、正直厳しい**。山南のゲームプラン通り試合が進んだという意味で、ベンチワークの差という面ももちろんありますが、山東が「競り合い（空中戦）では負けるからスキル（地上戦）では勝とう」など《贅沢な発想》ではいけない。**山東はスキルの面で相手を圧倒できない《貧乏家庭》にあるゆえ、泥臭くぶつかり集中を切らさず粘り、勝ちを拾う原点（「スキルの差をスコアの差にしない粘り強いサッカー」）を見失ってはだめだ**。もちろんスキルの向上は常にはからねばならないし、スキルがあるに越したことはないが、それに固執し他をサボるアガスケ（山形弁）になってはだめ、ということ。プラスして、ピッチ内で声を掛け合い、ピッチ内で状況を建て直す力はどうか。「**フィジカルの差をクレバーさで凌駕するサッカー**」という**山東サッカー部の最良の伝統を受け継いでいると言える戦いだったか**。口先でサッカーをすることで有名な**2年カンタ**が負傷退場した後はピッチ内の声が聞こえなくなったという**声掛け担当コーチのオオツキ先輩**の分析をどう受け止めるか。

選手権・県新人では、改善がみられるよう頑張りますので応援よろしく申し上げます。まず、今週末、別紙の通り**第7回進学校大会（ヤマコー杯）**が開催されます。**A会場が坊平のたいらぐらG（天然芝）、B会場が猿倉G（天然芝）**です。**宿泊先は坊平のウッティロッジ**です。

¹ これをされると、守備側はボールとマークする相手（マーク）を同時にとらえることができず、相手を視野の外においてしまいがちで、マークを逃してしまいがち。逆に言えば、攻撃側からすれば、**いかに相手の視野から消えてマークを外してボールを受けるかが重要**ということになります。相手の前で動いてばかりいる選手は、クレバーさに欠けると言えます。守備側からすると、**ボールとマークを同一視するポジショニングが基本**ということになります。この同一視のポジションを取ると、**相手よりもボールから遠いところに位置取りすることになりますので、ボールを先に触られるリスクはありますが、マークを外されるリスクはないので、あとは前勝負／先に触ること（Be first）だけを心掛ければ良い**ことになります。

² それを負けた反省はあります。